

ダニエル書 - 五十番

ダニエル書8章の預言の奥義を解き明かす：パルモニの啓示

Jeff Pippenger

2024-01-14

ダニエル書8章で、ダニエルは聖書の預言における諸王国の幻を与えられ、その後、問答の形で表される天の対話を耳にする。

そのとき、私は一人の聖なる者が語るのを聞いた。すると別の聖なる者が、語っていたその聖なる者に言った。「常の献げ物に関する幻と、荒廃をもたらす背きによって聖所も軍勢も踏みにじられることは、いつまで続くのですか。」そして彼は私に言った。「二千三百日までである。その後、聖所は清められる。」ダニエル書 8章13、14節。

最初の十二節はその幻を表しており、十三節と十四節は別の幻を指し示している。『取り去る』と訳される二つの異なるヘブライ語、そして『聖所』と訳される二つの異なるヘブライ語があるのと同様に、ダニエル書第八章には『幻』と訳される二つの異なるヘブライ語もある。

「take away」と訳される二つの語について、アドベンチズムの神学者たちは、どちらも「取り除く」を意味すると理解すべきだと主張する。「sanctuary」と訳される二つの語についても、アドベンチズムの神学者たちは、どちらも「神の聖所」を意味すると理解すべきだと主張し、「vision」と訳される二つの語については、アドベンチズムの神学者たちは、またしても二語の相違を曖昧にしてしまう。その区別はダニエルにとって十分に重要だったため、彼は意図的に大きく異なるヘブライ語の二語を用いた。ゆえに、私たちもその相違を見極め、尊重すべきである。13節の「vision」に当たる語はヘブライ語の「chazon」で、夢、啓示、神託-すなわち幻を意味する。

「vision」という語はダニエル書8章に10回出てきますが、それはヘブライ語の2つの異なる語を表しています。「Chazon」は13節に見られる語で、1節にも、さらに2節には2回、そしてもちろん13節にも、また15節、17節、26節にそれぞれ1回ずつ見られます。ダニエル書8章で「vision」という語が現れる10回のうち7回は、この「chazon」であり、単に「幻」を意味します。

ダニエル書8章で「vision」という語が現れるほかの三回は、ヘブライ語の「mareh」であり、見え方、または外観を意味する。8章では、このヘブライ語「mareh」は一度だけ「vision」ではなく「appearance」と訳されており、これによってその語義がよりの確に示されている。なぜダニエルは、訳者たちが同一の語として扱うほど意味の近い二つのヘブライ語を使い分けたのか。重要なのだろうか。

「神の御言葉にあるあらゆる原則はそれぞれしかるべき所を占め、あらゆる事実はそれぞれの意義を持っている。そして、その全体としての構造は、設計においても実行においても、その作者を証している。このような構造を構想し、形づくることのできるのは、無限なる方の知性以外にはない。」教育、123。

第二の問いへの答えは「はい」であり、ダニエルがその区別を設けた理由は本当に重要である。したがって、第一の問い―すなわちダニエルがなぜその区別を設けたのか―を理解しようと努めることは、預言を学ぶ者の責任となる。彼が「聖所」と訳されている語と「取り去る」と訳されている語について行った区別は、永遠にかかわる結果をもたらす。であるなら、「幻」と訳されている語の重要性がそれより劣るなどと、どうして誰が考えられるだろうか。「すべての事実」は「神の言葉」において「それぞれの関わり」を持ち、預言の「構造」に影響を及ぼし、また預言が「実行」されるときの成就にも影響する。

ダニエル書第八章で「幻」という語を考察し始めるにあたり、ダニエルの証言に「関係」のある「事実」は、ダニエル書八章十三節の問いに「二千三百日まで、そのとき、聖所は清められる」と答えたのが誰であったかという点である。

ダニエル書第八章に直接「関係」する事実が四つあり、私はそれらを取り上げるつもりである。一つは、ウライ川の幻が終わりの時代のための預言であると見なされてきたことであり、また、それは1798年の「終わりの時」に「封印が解かれた」ダニエル書の「知識」の象徴でもある。

神の御言葉をさらに綿密に研究する必要がある。とりわけ、私たちの働きの歴史においてかつてないほど、ダニエル書と黙示録に注意を向けるべきである。ローマ権力や教皇権に関しては、ある点では語ることが少なくなるかもしれないが、神の霊の感動のもとに預言者と使徒が書き記したことに注意を向けるべきである。聖霊は、預言が与えられることにおいても、描かれている出来事においても、人間の器は姿を隠してキリストのうちに隠され、天の主なる神とその律法が高められるべきであることを教えるように、事柄をそのように整えてこられた。

ダニエル書を読みなさい。そこに描かれている諸王国の歴史を、逐一思い起こしなさい。政治家たち、評議会、強大な軍勢を見よ。そして、神がどのように人の高ぶりをくじき、人間の栄光を塵に帰させたかを見なさい。偉大なのはただ神のみと示されている。預言者の幻の中で、神はある強大な支配者を倒し、別の者を立てる方として現れる。神は、宇宙の君主、永遠の御国を打ち立てようとしておられる方―いにしへの日の方、生ける神、すべての知恵の源、現在を治める方、未来を明らかにされる方―として啓示される。むなしく自らの魂を高ぶらせる人間が、いかに貧しく、いかに脆く、いかに短命で、いかに誤りやすく、いかに罪深いかを、読み、悟りなさい。

聖霊はイザヤを通して、私たちが最も注意を向けるべき対象として、生ける神、すなわちキリストにおいて啓示された神へと私たちを指し示します。「私たちのためにひとりの幼子が生まれ、私たちにひとりの子が与えられた。主権はその肩にあり、その名は不思議な方、助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」[イザヤ 9:6]。

ダニエルが神から直接受けた啓示は、特にこの終わりの時代のために与えられたものである。シナルの大河であるウライ川とヒツデケル川の岸辺で彼が見た幻は、今や成就しつつあり、預言されたすべての出来事はまもなくことごとく実現するであろう。

ダニエルの預言が与えられた当時のユダヤ民族の状況を考えてみなさい。イスラエルの民は捕囚の身となり、彼らの神殿は破壊され、神殿の礼拝は中断されていた。彼ら

の宗教は、いけにえの制度の諸儀式を中心としていた。彼らは外面的な形式を何よりも重要視し、真の礼拝の霊を失っていた。彼らの礼拝には異教の伝統と慣行が持ち込まれて墮落しており、いけにえの儀式を行うにあたって、影にすぎないものの向こうにある実体に目を向けなかった。人々の罪のための真のいけにえであるキリストを見いだすことができなかつたのである。主は、外面的な儀式が彼らの宗教のすべてとなってしまうように、民を捕囚にさせ、神殿の礼拝を中断させるように働かれた。彼らの原則と実践は、異教から清められなければならなかつた。心からの礼拝が回復するために、儀礼的な礼拝は停止させられた。霊的なものが明らかにされるために、外面的な栄光は取り去られた。

捕囚の地で、民が悔い改めて主に立ち返ったとき、主は彼らにご自身を現された。彼らのもとには主のご臨在を外的に示すものはなかつたが、義の太陽のまばゆい光は彼らの思いと心に差し込んだ。彼らがへりくだりと苦難のうちに神に呼び求めたとき、主はご自分の預言者たちに幻を与え、将来の出来事—神の民を虐げる者たちの打倒、贖い主の到来、そして永遠の御国の確立—を明らかにされた。Manuscript Releases 第16巻、333-335頁。

ウライ川の幻が終わりの日々のために与えられたという「事実」は、予言を学ぶ者に対し、その幻に表された出来事について何が予告されているのかを理解しようと努めることを求めている。ウライ川の幻に関連する預言的な「事柄」は、「予言が与えられる際にも、描かれている出来事においても」すべて「聖霊」によって「形作られ」た。預言者が幻を受けるときその身に何が起こっていたのか、また預言者が示す予言の出来事は、いずれも終わりの日に成就する事柄の預言的表象であるという認識をもって研究されるべきである。前の箇所は、ダニエルが「七つの時」の捕囚下にあったことを私たちが認識すべきだと強調している。

ダニエルは、黙示録11章の三日半の終わりに自分たちの捕囚を悟り、悔い改めて主に立ち返り、レビ記26章の祈りを果たし、尊いものを卑しいものからより分け、そのうえで主がご自身を彼らに現し、散らされていた者たちを集めるという約束を成就される、そうした人々を象徴している。それゆえ、彼らの「主たる注目の対象」は「キリストにおいて啓示された神」である。

ウライ川の幻の「意義」と、それがキリストによって「設計」された預言的メッセージの「構造」にどのように寄与しているかという点が、私たちが手短かに考察した最初の「事実」であり、引用された箇所は、私たちの主たる目標が「キリストにおいて啓示された」神の啓示であるべきことを示している。ダニエル書第八章では、イザヤが「その名は不思議な者、助言者、力ある神、永遠の父、平和の君と呼ばれる」と述べたときのように、キリストは示されていない。ダニエル書第八章では、神はキリストにおいてパルモニ、すなわち「不思議な数え手」あるいは「秘められた事柄を数える者」として啓示されている。

その「事実」は、「パルモニ」という名の「意義」や、その名が予言の「構造」と「設計」にどのように寄与しているのかを探し求めることを求めている。ダニエル書第八章における第三の「事実」として認識すべきなのは、その章にミラー派運動の中心的教理の柱が据えられているという点である。ミラーの最も輝かしい宝は十四節に見いだされ、現

在まさに成就しつつあるウライ川の幻に対して、その「事実」がどのような「意義」を持つのかを理解しようと努めるべきである。

ミラーの夢では、彼の部屋の中央のテーブルの上に小箱が置かれたとき、それは太陽のような明るさで輝いた。しかし終わりの時代には、その小箱はより大きくなり、最初にミラーのテーブルに置かれたときの輝きよりも十倍明るく光っている。ミラー派運動の中心的支柱を含むウライ川の幻の何が、終わりの時代にその教理の光を十倍に増すのか？1798年の終わりの時に明らかにされなかったが、終わりの時代に明らかにされるものは何か？ホワイト姉妹が「今まさに成就の過程にある」と言う、ウライ川の幻の「出来事」とは何か？

もし率直に、最初の三つの事実（ウライ川の幻、パルモニとして啓示されたキリスト、そして中心的教理の柱）を一つに合わせて考えるなら、私たちはウライ川の幻の研究に影響を与える一つの単純な前提を受け入れるべきだろう。これらの事実を総合すると、見ようとする者には、1798年に封印が解かれたそのメッセージが「時に懸けられている」メッセージであったことが示される。時の預言という要素がなければ、ミラーのメッセージは存在しなかつたらう。

この章に関係する第四の「事実」は、ミラー派が時の預言に基づくメッセージを掲げたということである。この事実を強調するために、13節と14節では、神はキリストにおいて「不思議な数え手（パルモニ）」として啓示された。異象が、14節の二千三百日の終結日を1844年10月22日と特定することだけにすぎないとする見解は、神がキリストを通してパルモニとして現わされたという啓示に冷や水を浴びせることになる。

アドベンチズムの神学者たちは、ダニエル書八章十三節の問いの重要性を葬り去るために熱心に努めてきた。自分たちの作り話という料理に望む風味を出し、無学で耳のかゆい人々がアドベンチズムの中核となる柱に結びつく真理に関心を持たないままにいるようにするためである。

再臨信仰の基礎であり、中心の柱でもあった数ある聖句の中で、何よりも重んじられていたのは、「二千三百日ののち、聖所は清められる」という宣言であった。[ダニエル 8:14.] これは、主が間もなく来られることを信じるすべての人にとって、なじみ深い言葉であった。幾千人もの口によって、この預言は彼らの信仰の合言葉として繰り返し唱えられた。そこに告げられた出来事に、自分たちの最も輝かしい期待と最も大切な希望がかかっていると、誰もが感じていた。この預言の日数は、1844年の秋に終わることが示されていた。当時、再臨派の人々は、他のキリスト教世界と同様に、地球、あるいはその一部こそが聖所であると考えていた。彼らは、聖所の清めとは終わりの大いなる日の火によって地が浄められることであり、それが再臨のときに起こるのだと理解していた。それゆえ、1844年にキリストが地上に再臨するという結論に至ったのである。

しかし、定められた時は過ぎたが、主は現れなかった。信者たちは、神の御言葉が失敗するはずはないと知っていた。誤りがあるとすれば、預言に対する自分たちの解釈の側に違いない。だが、間違いはどこにあったのか。多くの者は、1844年に2300日の期間が終わったこと自体を否定することで、この難題を軽率に片づけてしまった。彼

らがそれを主張する根拠として挙げられるのは、期待した時にキリストが来られなかったという事実以外に何もなかった。もし預言の日数が1844年に終わっていたのなら、そのときキリストは、火による地の清めによって聖所をきよめるために再臨していたはずだ。したがって、来られなかった以上、その日数は終わっていなかったのだ、と彼らは論じた。

この結論を受け入れることは、従来の預言の期間の算定を放棄することを意味した。2300日は、エルサレムの復興と建設のためのアルタクセルクセスの勅令が発効した紀元前457年の秋から始まると見いだされていた。これを起点とすれば、ダニエル書9章25-27節でその期間について説明されている預言のすべての出来事の適用に完全な調和があった。六十九週、すなわち2300年の最初の483年は、メシア、すなわち油注がれた方に至ることになっていた。そしてキリストが紀元27年に受けた洗礼と聖霊による油注ぎが、その規定を正確に成就した。第七十週の半ばに、メシアは断たれるはずであった。洗礼から三年半後、すなわち紀元31年の春に、キリストは十字架につけられた。七十週、すなわち490年は、とりわけユダヤ人に関わるものとされた。その期間の満了にあたり、国民は彼の弟子たちを迫害することによってキリストの拒絶を確定し、使徒たちは紀元34年に異邦人へと向かった。こうして2300年のうち最初の490年が終わったので、残りは1810年となる。紀元34年から1810年を数えると1844年に至る。「そのときには、聖所は清められる」と天使は言った。その預言の先行するすべての規定は、定められた時に疑いなく成就していた。この算定によれば、1844年に聖所の清めに相当する出来事が起こったとは見えないという一点を除いて、すべては明瞭で調和していた。その日数がその時に終わったことを否定するのは、この問題全体を混乱に陥れ、預言の紛れもない成就によって確立された立場を放棄することになる。

しかし神は、大いなる再臨運動においてご自分の民を導かれ、その働きには神の力と栄光が伴っていた。そして、それが暗闇と失望のうちに終わり、虚偽で狂信的な熱狂として非難されることをお許しにならなかった。神はご自分のみことばを疑いと不確かさの中に放置されることはなかった。多くの者が以前の預言期間の算定を放棄し、それに基づく運動の正しさを否定したけれども、他の者たちは、聖書と神の御霊の証しによって支えられていた信仰と経験の要点を捨てることを望まなかった。彼らは、預言の研究において健全な解釈の原則を採用してきたと信じ、すでに獲得した真理を堅く保ち、同じ路線で聖書研究を続けることが自分たちの務めであると考えた。彼らは熱心な祈りをもって自分たちの立場を見直し、誤りを見いだすために聖書を研究した。預言期間の算定に誤りを見いだせなかったので、彼らは聖所の主題をさらに綿密に調べるよう導かれた。

私たちは、ウライ川の幻が示されている同じ箇所、ホワイト姉妹から「神の御言葉をはるかに綿密に研究する必要がある」と教えられている。神学者たちは、The Great Controversy の前掲の箇所にある「預言期間」という主題を、あたかもホワイト姉妹が論評の対象を限定しているその「預言期間」とは、二千三百年の預言に含まれる五つの預言のことだと言わんばかりに提示する。というのも、彼らの主張では、そのうち四つがその箇所で明確に取り上げられているからである。だが、その主題を「はるかに綿密に」研究すると、複数形の「預言期間」という語は、ホワイト姉妹の著作においては、1844年10月22日に成就すべきであった二つの預言を指すのがより正確であることが明らかになる。

ガブリエルがダニエルに示した、二千三百年に含まれる五つの具体的な時の預言がある。第一は四十九年で、「街路と城壁が苦難の時代に築かれる」とされている。第二は、紀元前457年を起点として四百八十三年後のキリストの洗礼。第三は彼の十字架刑、第四は、ユダヤ民族のために特別に区別された四百九十年の終わりに、福音が異邦人に伝えられるようになる時であり、第五は、ただこの第五の時の預言だけが、1844年10月22日に終わった。先の四つの時の預言は1844年よりもずっと前に終わっている。では、ホワイト夫人が、1844年に終わるはずの「預言の期間」という複数形の表現を用いるとき、実際には何を意味しているのだろうか。

ミラー派の最初の失望に言及しつつ、彼女はその問いへの答えを次のように明らかにする：

私は、神の民が期待に満ちて喜びながら主を待ち望んでいるのを見た。だが神は、彼らを試みようとして決めておられた。預言の期間の算定にあった誤りを、神の御手が覆い隠しておられた。主を待ち望んでいた者たちはこの誤りを見いだせず、その時期に異議を唱えていた最も博学な人々もまたそれに気づかなかった。神は、ご自分の民が失望に遭うように取り計らわれたのである。期日が過ぎ、救い主を喜びの期待をもって待っていた者たちは悲しみ、落胆した。一方、イエスの現れを愛してはおらず、恐れからそのメッセージを受け入れていた者たちは、期待された時に主が来られなかったことを喜んだ。彼らの信仰の告白は心に及ばず、生活を清めることもなかった。期日の経過は、そのような心をあらわにするのにふさわしいものだった。彼らは、真に救い主の現れを愛していたがゆえに悲しみ失望している人々に、真っ先に背を向け、嘲った。私は、神がご自分の民を試し、試練の時にたじろいで退く者を見分けるために厳しい吟味の試練を与えられたことのうちに、神の知恵を見た。

イエスと天のすべての軍勢は、彼らの魂が愛したお方を見たいと甘美な期待を抱いて慕い求めていた人々を、同情と愛をもって見つめていた。天使たちは彼らの周囲にとどまり、試練の時に彼らを支えた。天からの知らせを受けるのを怠った者たちは暗闇に残され、神が天から彼らに送られた光を受け取ろうとしなかったため、神の怒りが彼らに対して燃え上がった。主がなぜ来られなかったのかを理解できず失望したもの、忠実であった人々は、暗闇の中に置き去りにはされなかった。彼らは再び、預言の期間を調べるために自分たちの聖書へと導かれた。主の御手が数字から取り去られ、その誤りが明らかにされた。彼らは、預言の期間が1844年にまで及んでいること、そして、預言の期間が1843年に閉じることを示すために自分たちが提示していたのと同じ証拠が、むしろ1844年に終結することを証明していることを悟った。Early Writings, 235-237.

「預言の期間」とは、ミラー派が当初は1843年に至ると信じていた、「1844年に至る」とされた「預言の期間」のことである。1844年に至った「預言の期間」は三つの期間で、いずれもハバククの表に示されている。その三つのうち一つは単に1844年に「触れる」だけで、残る二つは1844年10月22日にまで至る。千三百三十五日は1844年のまさに最初の日に至り、そのときミラー派の最初の失望が訪れ、またハバクク書2章とマタイ25章の十人の乙女のたとえの双方における「遅延の時」が始まった。

ダニエル書8章14節の二千三百日は1844年10月22日に達し、ユダ南王国に対する「七つの時」の二千五百二十年もまた同じくそこで終わった。パルモニはダニエル書8章13節で自らを「驚くべき数を数える者」として名乗り、その後、彼が示した預言の「構造」と「設計」には、相互に結びついた少なくとも十の年代預言が含まれていた。

次の記事では、これらの真理についてさらに検討を始めます。

キリストは、心と魂に刻まれるべき教訓を世界にお与えになった。『これが永遠のいのちである。すなわち、ただひとりのまことの神であるあなたと、あなたがお遣わしになったイエス・キリストを知ること』と彼は言われた。だがサタンは人間の心に働きかけ、「これをせよ、あれをせよ。そうすればあなたがたは神のようになれる」と言う。欺きの論法によって、彼はアダムとエバに神のことばを疑わせ、その代わりに、背きと不従順へと導く理屈を当てがった。そして彼の詭弁は、エデンで行ったのと同じことを、今日もなお行っている。キリストが私たちの世界に来られたとき、彼はご自分の教会の土台として、謙遜な漁師たちを選ばれた。これらの弟子たちに、彼はご自分の御国と使命の本質を説明しようとされた。しかし彼らの限られた理解が、彼に制約を課した。彼らは律法学者やパリサイ人の言葉を受け入れてきたため、彼らの信じていることの多くは真実ではなかった。そしてキリストには彼らに語るべきことが多くあったが、彼が伝えたいと切に望んでおられた多くのことを、彼らは聞き入れることができなかった。

「キリストは、この時代の宗教家たちが誤った思想にあまりにも満ちているため、彼らの心には真理の入る余地がないことを見いだす。与えられた教育において、教師たちは不信仰な著者たちの思想を混ぜ合わせている。こうして彼らは若者の心に毒麦を蒔いてきた。彼らは若者にも年長者にも示すべきでない思想を口にし、自分たちがどんな種を蒔いているのか、またその結果としてどんな収穫を刈り取らねばならないのかを少しも考えない。」レビュー・アンド・ヘラルド、1900年7月3日。